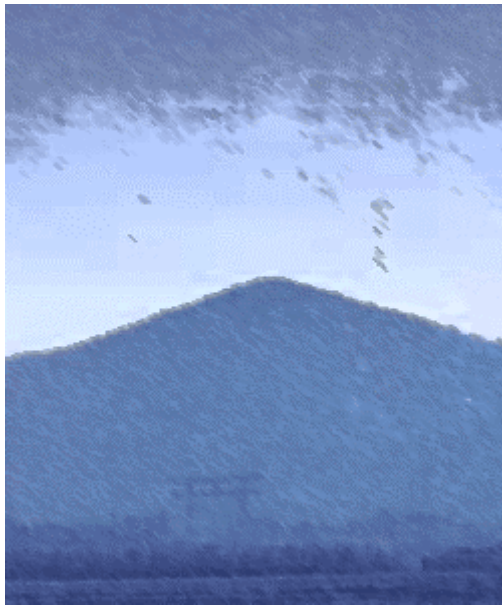


三輪山への別れ



古代の人々が神とあがめた三輪山
(奈良県桜井市)

そのような社会情勢、国際関係
との関わりの中で17、18番の
歌が詠まれています。これは前書
に額田王が近江の国へ行ったとき
の歌だと記されています。

うまさけ みわ やま
味 酒 三輪の山

あをによし 奈良の山の 山
の^ま際に い隠るまで 道の

くま つ
隈 い積もるまでに つばらにも 見つつ行かむを しばしば
も ^{みさ}見放けむ山を 心なく 雲の 隠さふべしや (巻1・1
7)

(三輪山をいつまでも見ていたいのになに雲が隠してしまって、雲よ心あるべ
きだ。三輪山を隠してよいものか。)

反歌

三輪山をしかも隠すか雲だにも心あらなも隠さふべしや

(巻1・18)

18番も同じ主旨を短く歌っています。

日本書紀を見ると

『日本書紀』 天智6年(667年)

やよひ かのとのとり ついたちつちのどのうのひ みやこ
「三月の辛酉の朔己卯に、都を
あふみ うつ ことき あめのした おほみたから
近江に遷す。是の時に、天下の百姓、都遷すこ
ねが そ あざむ ものおほ わざうたまたおほ
とを願はずして、諷へ諫く者多し。童謡亦衆し。
ひるよる みづながれのところおほし
日日夜夜、失火處多。」

左注と日本書紀とによって、17、18番の歌は、天智が都を倭から近江へ遷したときに、額田王が三輪山への思いを歌った歌だと知られています。

この歌の中に入る前に国際情勢のことを述べます。

『日本書紀』 天智六年(667年)

つき やまとのくに たかやすのき さぬきのくに
「是の月に、倭國の高安城・讚吉國の
やまだのこほりのやしまのき つしまのくに かなたのき つ
山田郡屋嶋城・對馬國の金田城を築く。」

奈良から山を一つ越えると難波へ出ます。この難波に出る山の辺りに高安城を築いたと記されています。防衛のための山城です。その高安城に塩と穀物を蓄えたことが、別の記事に記されています。おそらく戦闘に備えた準備です。

中国、朝鮮半島から日本にはいる場合、朝鮮半島を渡って太宰府辺りに入り、瀬戸内海を抜けて難波に入る。これが日本の中心に入る一番早い路です。

大和が難波に近いために、天智天皇は更にもう一つ山を越えた近江へ都を遷す、という戦略を立てたのでしょう。それが 667 年の近江への都遷りのもっている歴史的な背景なのであろうと考えられます。これに関わる次のような記述が日本書紀に出てきます。

『日本書紀』 天智十年（671 年）

「しもつき の きのえうま の 朔 みづのとのうのひ
十一月の甲午の朔癸卯に、
つしまのくにのみこともち つかひ
對馬國司、つかひを
つくしのおはきみこともちのつかさ、まだ まう つきた
筑紫大宰府に遣して言さく、「月生ち
て ふつかのひ ほふしだうく・ つくしのきみさちやま
て二日に、沙門道久筑紫君薩野馬・
からしまのすぐりさば・ぬのしのおびといは よたり もろこし
韓嶋勝婆婆布師首磐、四人、唐よ
きた まう もろこし つかひくわくむそうらむももたり
り來りて日さく、『唐國の使人郭務悰等六百人、
おくるつかひさたくそんとうら す ふたちたり
送使沙宅孫登等一千四百人、總合べて二千人、
ふねよそあまりななふな の とも ひちしま とま
船四十七隻に乗りて、俱に比知嶋に泊りて、
あひかた いまわれら ひとふね かずおほ たちまち
相謂りて曰はく、今吾輩が人船、數衆し。忽然に
かしく いた おそ か さきもり おどろ とよ
彼に到らば、恐るらくは彼の防人、驚き駭みて
いたたか すなは だうくら まだ あらかじ
射戦はむといふ。乃ち道久等を遣して、預め
やうやく まうけ ころろ ひら まう
稍に來朝る意を披き陳さしむ』とまうす」

二行目から「唐から使者が来た。600人、そして1400人、合わせて2000人、船47隻に乗って来た」と記されています。唐の朝廷から日本の朝廷へ遣わされた人数として、2000人はあまりにも多い。おそらくこの2000人という人数は軍事的な示威行動を見せたのであらうと思われる。その中で、この都遷りが行われたと理解されます。

この歌の内容をみると、三輪山への別れを惜しんでいます。額田王たちは大和を去って近江へ行くけれど、故郷のあなたのことはいつまでも忘れない。あなた（三輪山）のことをとても思っています。いつまでも見ていたいと歌うことによって、三輪山の神の心を鎮めているらしいのです。そこで思い出して欲しいのが、天智が歌った13、14、15番の歌です。これは、ある場所の神の心を和めるために歌っています。印南国原を通る時にあなた（印南国原）のところには、このような神話があった。私たちは今あなたのこと、その神のことを思っていますと歌うことによって、無事に通ろうとしました。この17、18番の歌も大和の国の代表的な山である三輪山への思いを歌うことによって、大和を無事に離れるように、そして近江の国でよい都を営むことができるようにという願いを込めて歌っているらしいのです。ほぼ1400年前におけるこのような思いは望郷とは少し違い、もう少し宗教的な信仰と関わっていたようです。それがすなわち自分達の安全を神に祈ることでした。